紀要 Vol. 40 No. 1（通巻第 61 号）76 ～ 85(2016)

一人ひとりを大切にする保育(2)
―0 歳児の入園期に着目して―

伊藤　美保子※1・西　隆太朗※1・宗髙　弘子※2

Caring for Each and Every Child: Accepting a New Infant and its Family

Mihoko Ito, Ryutaro Nishi and Hiroko Munetaka

When an infant enters a nursery school, it is important to treat the family so that the infant can seamlessly get accustomed to the new life spent there. The authors visited a nursery school and observed and interviewed parents and infants of 8 families who newly entered the school. The outline of the caring practice of the school to treat new infants was described in detail. The interview and observation showed 6 factors which are important to consider when accepting a new infant and its family; trust, flexibility, treating the family as a whole, interaction between infants and families, parents' gradually understanding of the school, and the parents' insight into their own life.

Key words : infant, accepting a new infant and its family, early childhood care

1．問題・目的 ― 0 歳児の入園期における保育のあり方について

保育所保育指針（厚生労働省, 2008）にも繰り返し述べられているように、保育園と家庭との連携は重要である。園生活の出発点となる入園期においては、家庭からはじめて保育園という集団の中での新しい生活を経験していく子ども達にとっても、また保護者にとっても、できるだけ無理なく安心して馴染んでいけることが望まれる。園・保育者によるこうした配慮は、0 歳児の入園期にはとくに重要になってくる。

乳児保育における家庭と園生活のスムーズな接続に向けては、「慣らし保育」がさまざまに工夫されてきている。しかし、こうした保育園による対応・配慮のあり方や実際面について研究したものは、いまだ数少ない。

乳児保育ではなく、新入園の時期全般をどう考えるかについては、主に保育者の心構え、家庭との連携、環境整備といった点からの議論が早くからなされてきた。倉橋惣三の「新入園児を迎えて」(1916) はその最初期のものであり、現代も読み継がれる古典である。子ども達を一人ひとりとして迎えること、またそのことによって保育者自身の存在も新たにされること、家庭と園とは生活においても心においても一続きのものであること、保護者と連絡を取り

キーワード：0 歳児，入園期の保育，乳児保育
※1　本学人間生活学部児童学科
※2　元就実大学

合って育てる心をともにすることなど、そこに述べられた人間学的な保育の基本は、今も変わらない。

その後100年に渡って、保育者が入園児の保育者の心構えを説いたものは少なくないが（堀合, 1970ほか）、園・保育者の配慮とその実際面について、研究の形で扱ったものはほとんどない。入園期についての研究は、幼稚園への3歳児入園が広まる中で散見されるようになったが、専ら子どもの側の適応過程や（吉村・望月, 1995;また、保育園の入園期については齋藤, 2013）、母親の体験（今井, 2014）に着目するものであり、保育の側の要因を扱ったわけではなかった。

本研究で取り上げる、乳児保育における入園期については、慣らし保育の現状把握に関する学会発表がいくつかなされてきた段階であり（清水, 1983；土山・平野, 1984；諏訪ほか, 1989）、乳児保育の実践書においても、乳児の慣らし保育を取り上げたものは数少ない。その中で、ハンガリーの保育を取り入れた担当制や（サライ, 2014）、白梅学園における乳児保育の研究実践は貴重なものだと言えるだろう。ハンガリーの保育実践では早くから担当制や慣らし保育など、乳児保育への配慮がなされてきており、白梅学園でもその影響を取り入れている。西ノ内（1994）は幼稚園付設の2歳児プレイルームではあるが、親子登園の実践を行うことにより、保育園での乳児保育のあり方について考察している。また、中村（1993）は、保育園での慣らし保育の実際について、保護者と一緒に保育園で過ごす時間を持ち、1週間かけて保育時間を延ばしていく日程表など、基本的な実践方法の概略を説明している。ただ、サライ、西ノ内、中村らのいずれも、ごく大枠での記述であるため、入園期を子どもと保護者にとってよりよい体験にしていく実践をどう実現していくかについては、各保育現場がそれぞれに工夫して進めていることと思われる。

0歳児の入園期における保育を考える上で先行研究を見てきたが、白梅学園のように先駆的な実践を行っている現場もある一方で、それについての研究や実践書は数少なく、その成果も十分に共有されていないことが示唆される。このような状況においては、0歳児入園期の保育について、すでに進められている優れた実践にも学びながら研究を進めていくことが必要になるであろう。

本研究ではとくに、その枠組み以上に、実際面に着目したい。どんな実践もそうであるように、保育の実践も、枠組みや計画書によっては尽くせない側面を持っている。入園する子ども達にも一人ひとり個性があり、保育のあり方も園によってさまざまに異なっている。親子で慣れていく期間を取るにしても、保護者の仕事の状況によっては祖母が連れてくる日もあったり、また0歳児の体調によって休みの日があったり、いわゆる「慣れ」の過程が単純に、直線的に進むとは限らない。さらに言えば園に馴染むとは、生活の形式面のみならず、子ども達・保護者の体験や感情の問題でもあるわけだから、きわめて多様だと考えられる。したがって研究においても、こうした個性・多様性や体験の実質が取り入れられるような方法が必要であろう。

本研究では、A保育園での実践をもとに、0歳児の入園期において一人ひとりを大切にする保育がどのように具体化されているか、観察とインタビューによる事例研究を行い、その意義について考察する。実施方法の枠組みを調査するだけでなく、観察やインタビューを行うことにより、より実際的な研究を行うことが可能だと考えられる。

2．方　法

A 保育園は、担当制を取り入れた丁寧な保育を 20 年近く実践してきた先駆的な園であり、多くの見学・研修を受け入れてきている。本研究では X 年 4 月～ 12 月にかけて、A 保育園の 0 歳児クラスを毎週訪れ、保育場面を観察し、ビデオカメラを用いて記録するとともに、保護者・保育士へのインタビューを含めたフィールドワーク的調査を行った。この期間に 19 人の入所があり、そのうち 8 人の子どもの保護者から、エピソードや写真を研究発表に用いることについて了承を得て、観察・インタビューを行った。

インタビューは著者の一人であり、長年の保育経験を持つ伊藤が担当した。その際には特別な場を用意して構造化された質問を行うのではなく、基本的には保育室の中に身を置きながら、保護者から自然な形で今の思いを聞く形とし、保護者が体験を語りやすい環境に配慮した。

保育観察においても、インタビューにおいても、観察者・インタビュアーは積極的に介入するような形ではなく、その場に展開する保育や、保護者の語りを、共感を通じて受け止める形をとった。人間の原点というべき乳幼児期の子ども達と出会い、信頼関係や言葉にはならない感情の交流を大事にしながら行われる保育という営みについては、研究者自らの主観を含みこんだ共感による理解を欠くことができない。また、保育の実践や研究を理解する上では、研究者が保育の実践知を持っていることも求められる。ある専門分野の研究論文を理解するのに、前提となる文献への広い知識が必要とされるのと同じように、保育実践を理解する際には、われわれは実践という書物をひもとかねばならない。

このように研究者の主観や実践知を含みこんだ研究の必要性や、その方法論については、保育学の中で、また広く実践研究の中で、つねに重要視されてきたところである（津守, 1979, 1999；Schön, 1983；鯨岡, 2005；大場, 2007；西, 2013）。本研究は方法論そのものの研究論文ではないので、詳細はそれらの先行研究を参照されたい。

したがって以下の結果・考察では、観察データを人為的に分類整理するのではなく、写真なども交えながら、保育場面の観察や、保護者・園長を含む保育士へのインタビューについて、いわばその場に身を置いて、それぞれの実践経験に照らして追体験しやすい形で述べることとする。

3．結果・考察

(1) A 保育園における慣らし保育の概要

まず、A 保育園における慣らし保育の概要について園へのインタビュー等を通して明らかになった点を述べる。また実践面については、観察から得られた情報や写真も用いて具体的に述べる。

A 保育園では、入所日から 2 週間程度、慣らし保育を行っている。これは中村（1993）が実践した 1 週間よりも長い期間である。

A 保育園での 1 週目は、1 ～ 2 時間から始めて、少しずつ保護者とともに園で過ごす時間を長くしていく。2 週目は、子どもが保護者と離れて園で過ごす時間を、1 時間程度から始めて少しずつ長くしていく。もちろんこのようなペースは一律にではなく、子どもの体調や保護者の仕事の状況など、一人ひとりの子どもや家庭に応じて柔軟に進められている。

このように、園で過ごす時間を少しずつ増やしていくことで、子どもと保護者が安心して入園期を過ごせるよう配慮されている。保育士にとっては、保護者ともゆっくりコミュニケーションを取りながら相互理

解や信頼関係を築いていけるとともに、その子の個性や生活様式について知る機会にもなっている。

図１　抱っこの親子とともに

図２　遊びの中で

図１は眠たくなった子どもを母親が抱いている場面、図２は子どもが遊んでいる場面である。いずれも、園の中で、親子が自然な形で過ごしている生活や遊びの場面を、担当の保育士が親しく見守っているところである。保育士も保護者も笑顔で、温かな雰囲気や子どもへの想いをともにしながら過ごしていることが分かる。こうした時間を共有する中で、普段の生活の様子、子どもにとってどんなふうにしてもらうのがよいのか、子どもと保護者の個性や人となり、今気にかかっていることなどを、保育士が知ることができる。保育士は、子どもが保護者とともに過ごしている子どもが甘えたくなったらこんなふうにするんだな、眠くなったらこんなふうに寝かせてもらうんだなと、具体的に理解していく。また、「今日どのくらい食べましたか」などと自然な会話の中で保護者に聞きながら、子どもの生活を理解し、子どもを受け止めていく。

子どもは心地よさや遊びの楽しみを通じて園に親しむことができ、また保護者も、園の生活がどんなものか、担当の保育士がどんなふうに接してくれるのかなど、徐々に実感をもって知ることができる。

図３　食事の場面

食事についても、いきなり園での食事に切り替えてしまうのではなく、最初のうちは保護者に食べさせてもらう（図3）。それによって保育士は、家庭ではこんなふうにしているということを実際的に理解し、その後の保育に活かしていく。

A 保育園の園長は、こうした慣らし保育を行う理由について、次のように語っている。「入園するからといって、子どもと保護者をいきなり引き離すのは、どちらにとっても苦痛なことになってしまう。子どもが園にいて安心することも大事だし、また保護者にとっても保育士の動きや、クラスの他の子ども達が分かることで、安心感が生まれる。保育士にとっても、子どもと保護者の様子がよく理解できるし、どんなとき、どんなふうに泣くのか、何をどんなふうに食べるのかなど、その子の個性や、生活の具体的な側面について知ることがで

きる」。この言葉は、0歳児入園期の慣らし保育の意義を端的に示すものであろう。そのことが言葉だけでなく、日々の保育の中で実際に行われている様子を、観察やインタビューから見て取ることができた。

(2) インタビュー・観察から

次に保護者を対象に行ったインタビューと保育の観察から、A保育園での入園期が実際にどのような意義を持っているか、また子ども・保護者にどのような体験をもたらしているかについて報告する。インタビューや観察から得られた内容は多岐にわたるが、これを① 信頼関係、② 家庭に応じた柔軟な対応、③ 家庭全体とのかかわり、④ 保護者同士・子ども同士のかかわり、⑤ 保護者による保育理解、⑥ 保護者自身の洞察として示す。

① 信頼関係

A保育園の慣らし保育について、どの保護者からも語られたのは、園に対する信頼関係。とくに、A保育園が「開かれた空間」であることが、そうした実感につながっていた。「園の様子を見て、先生と話すことができるので、安心して過ごすことができた」「他の子ども達に接する様子も見ることができるので、先生方の優しさや温かさも分かり、信頼して子どもを預けることができる」「いつでもどうぞ入ってきてくださいと言ってもらえて、保育園自体が開かれた空間なので、そのことがとても安心する」など、徐々に慣れていけること、園の保育をありのままに実感できること、生活時間をともにする中で信頼関係が築かれることは、どの保護者からも意義あるものとして語られた。

以下に、インタビューの断片からもう少し具体的な語りを挙げて、その意義を示す。

語り1　人見知りの時期の子どもを持つ母親は、次のように語っている。「様子を見ることができるのが、とてもいいと思う。徐々に段階を踏んでいけるので、よく分かる。ていねいにケアしてくださっているのも見ることができるし、子どもにとってもストレスが少ないんじゃないかと思う。他の子にも、こんなふうにケアしてくれるんだなということが分かる。密閉されていない、開かれた空間であることが、とても安心する。昨日今日と、少し離れて過ごす時間を取り始めたところだが、心配が少し薄らいできた。ママ友ともいろいろ話をするが、慣らし保育といっても、園によっていろいろに違うんだなと言っている」。

語り2　2人目の子どもが入園した母親は、こう語っている。「上の子が入園したときは、それまで私とべったりだったから、離れるときは大泣きしたが、先生と遊んでいる姿を見るようになり、安心できた。下の子はそれとは違って、誰にでもかかわっていく」。

語り3　3人目の子どもが入園した母親。「3人ともこの園に入園し、3人とも慣らし保育をした。一番思うことは、保育園が閉鎖的ではないということ。保護者が入ってくることについても、いつでもどうぞと言ってくれる。いつでも保育を見てもらっていいし、一緒に考えていきましょうというところが、すごく閉鎖的でない保育園だと思う。自分も子どもと一緒に保育園に入ることで、園のことを信頼できるし、安心できる。園ではどんなふうに生活しているのかを、実際に見ることができる方がいいと思う。3人目の子どもなので、園のこともよく分かる。担当制をとっているので、その先生のことがよく分かり、親しんでいける。保育のことも、何ヶ月ならこんなおもちゃで遊ばせてくれるんだなということも分かる」。

どの保護者も、我が子を預けるにあたっては、そこがどんなところか知りたいと思うものだろう。インタビューからも、保育

園のことが実感をもって分かることが、園への信頼感につながっていることが分かる。説明や情報交換に留まらず、生活面を含めて子どもと一緒に過ごすことを通して園を知っていくことが、体験を伴う理解へとつながっている。「いつでも来てください」という呼びかけも、言葉だけでなく、実際に日々園での時間をともにするなかで、実質を伴ったものになる。「開かれた空間」としての園は、情報面や形式面だけでなく、こうした生活の実感を通して実現されているのだと思われる。きょうだいが同じ園に在籍する場合は、こうした生活の実感が園との間に築かれているので、園に馴染む上でも力になるであろう。

保護者は、自分や自分の子どもに園や保育士がどう対応してくれるかだけを見ているわけではないことも、インタビューから見てとることができる。その場に身を置くということは、言葉にしがたい場の雰囲気や、直接の対応ばかりでなく、その周辺にあるさまざまな状況、人々の様子といったものも自然と目に入り、感じ取られるということでもある。語り1にも見られるように、保育士はその親子だけを一対一で見ているわけではないから、常時他の子にもケアをおこなっているが、「開かれた空間」としての保育園では、そんな様子からも自然と信頼関係が築かれていくことが分かる。

語り1に見るように、そんな様子は言葉だけでなく保護者にも子どもにも伝わっていくものである。慣らし保育のための特別なかかわりばかりでなく、信頼関係とは園の保育のあり方すべてが問われるものであろう。したがって、新しい子どもを迎えるためには園の保育のあらゆるものが生きてくるし、その具体的なありようが園ごとに個性的なものになってくるものだと考えられる。

② 家庭に応じた柔軟な対応

すでに述べたように、慣らし保育について1週間なり2週間なりの計画が示されることがあるが、保育は生活にかかわる営みであり、そこには計画通りに行かないさまざまな要因もかかわってくる。

観察1　保育士と母親が話し合っている。2週間の慣らし保育を予定していたが、母親の仕事の再開が予定より早くなったため、祖母の協力を得て、必要に応じて連絡を取り合いながら進めていくこととなった。保育士は、子どもが慣れてきつつある様子を母親に伝えながら、母親の期待と不安を受け止め、「連絡帳にもしっかり書きますね」と話し合っていた。

A保育園では、家庭や仕事の状況など、ここの多様さや変化にも配慮し、柔軟に対応していることが分かる。離れて過ごす時間が増えていく過程では、連絡帳などのコミュニケーション手段が重要になってくる。そのとき、単に文字だけのやりとりだけではなくて、最初に観察1のような形で、保護者と相談し、心通じ合う話し合いの中で連絡帳が位置づけられたなら、そのことが今後のコミュニケーションを支えていくものと思われる。

③ 家庭全体とのかかわり

保育士は、子どもを連れてくる母親の想いも丁寧に聴いて受け止め、支えていくが、母親だけとかかわっているのではなく、家庭全体ともかかわっている。

語り4　母親とともに慣らし保育を進めている中で、ある日は父親も一緒に参加した。父親は、「まだつたい歩きをしているところなので、他の子と違うところが少し心配だが、その子の発達にあった形で慣らし保育をしてもらえることはありがたいと思う」と言った。

観察２　祖母も協力しながら慣らし保育を進めている家庭の母親が、子どもを迎えに来る。今日は自分から遊びに向かおうとしていたと聞き、「よかった」。食事ができたかなと気になっていたので、もしあまり食べられないようなことがあるようなら、祖母に連絡しようと話し合っていた。

ここでは、母親、父親、祖父母など、特定の一人だけではなく、家庭全体とかかわり、協力し合いながら、それぞれの人々とよく話し合って、信頼や相互理解を深めている様子を見ることができる。

④ 保護者・子ども同士の関係

これまで園・保育士と家庭との関係を取り上げてきたが、慣らし保育の過程では、保護者同士・子ども同士の関係もまた深められている。

観察３　慣らし保育に訪れた夫婦に、他の子ども達も懐いたり、一緒に遊んだりする様子が見られた。父親の膝の上に他の子ども達も座ったりして、あやしてもらっている。また、同じ時期に入園する家庭も多く、母親から母親へ食事のことなどを教えていたり、保護者同士の交流や親しみが生まれていた。

保護者や子どものことは、もちろん園や保育士が支えるよう努めているのだが、同時に保護者同士・子ども同士も支え合う関係が生まれる。図４は、入園期の夫婦に他の子ども達が懐いていき、それを保育士に抱っこされたもう一人の子どもも興味を持って見ているところである。このときクラスの中にはそれぞれに笑顔があり、温かな雰囲気が生まれたが、このように保育士によって支えられるというだけでなく、保護者と子ども達の関係も、自然に、また能動的なかかわりを通して深まっていくことが見て取れる。他にも、インタビューはクラスの保育の中で行っているので、母親が他の子がじゃれて遊びに来ているのをあやしながらといった形で話を聞くことも自然とあった。

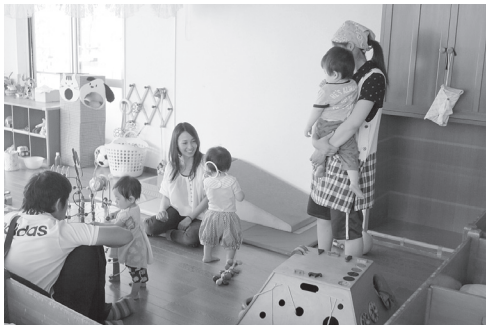

図４　保護者と他の子どももかかわる

入園期に限らず、送り迎えや行事など、日頃から触れあう中で、他の保護者からも子ども達が見守られ、また他の子ども達の成長によっても保護者が心明るくされるのも、集団保育の場が持つ力だと言えるだろう。０歳児のクラスは、年間を通じて一人また一人とメンバーが増えていく場だが、クラスが人と人とが育ち合う場として成熟してくこともまた、入園期の家庭を支える力になると思われる。

⑤ 保護者による保育理解

①でも、保育を理解することが信頼関係につながることが示されたが、保護者は子どもとともに園での時間を過ごす中で、さまざまな実際面や体感的なものを含めて、保育への理解を深めていく。

語り５　３人目の子どもが入園した母親は、「Ａ保育園では、食事は一対一から始めてくれるし、２歳でも少人数なので安心できる」と言う。
語り６　はじめて入園する子どもの母親。「慣らし保育の間に、連絡の取り方など、いろいろ学ぶことができる」。

園での生活の具体面については、そこに身を置くことで理解していける部分が大きいだろう。連絡など実際面のことや、クラスの他の子ども達のこと、子どもと保育士の信頼関係ができていく様子など、慣らし保育の期間に、見て体験することを通して、保護者は段階を踏んで理解していくことができる。

語り５に示されるように、クラスごとの保育を見てきた保護者にとっては、たとえばＡ保育園における担当制のように、保育のあり方につても、単なるやり方として以上に、何のために、どういう意味でそのような保育がなされているのか、実感を通して理解されていく。実際の場面を見て体験することは、園の保育の中身や意義についての理解が深まることにもつながっている。

⑥ 保護者自身の洞察

インタビューの中で自然と心が開かれていくうち、保護者自身の思いや洞察についても聴くことができた。

語り７　第５子が入園し、これから仕事を始めようとしている母親。「仕事はお給料や時間などではなく、自分のしたい仕事をするべきだなと感じる。このごろ子どもも、離れて過ごすんだなということを分かってきたようだ。一緒に慣らし保育ができることはありがたいと思う」。

語り８　はじめての子どもが入園した母親が、夫婦で来ているとき、話の流れの中でインタビュアーに語られた。「今までは子どもがいない状態で働いていた。今度同じ職場に復帰するが、子どもがいる状態で働くということになる。そういうことに自分が慣れるかということも少し心配している」。園の話ばかりでなく、夫婦とインタビュアーとの間で、自然とこうした思いを共有する機会となった。

語り９　３人目の子どもが入園し、仕事への復帰を控えている母親。「家にいるときは、家事をしながら子どもを見る時間も多かった。園での慣らし保育の時間は、この子といられる確実な時間として、大切に過ごそうと思う。かえって落ち着いて子どもと向き合える気がする。自分自身にとっても、これから仕事に復帰するんだなという思いを新たにする大事な時間になる」

入園期は、子どもにとって重要な時期であると同時に、保護者のライフサイクルにとっても変化を迎える転機の一つとなる。「慣らし保育」とは、単に子どもを園に「慣れさせる」といったことではないことが、これらの語りからも窺える。子どももケアする人々や友達など、新たな世界の広がりを得て、保護者も子どもを持つ者として、社会に生きる人間として、新たな時季を迎え、それぞれに成長していく過程を、園と保育者がともにしている。語り９が示すように、園は単に子育ての一部分を分担するというだけではなくて、子どもも保護者も新しい生活へと歩んでいく、大切な時期を支えていることが窺える。

４．結　　語

０歳児の入園期を観察し、保護者にインタビューすることで、実際面での配慮を含めて、さまざまな示唆が得られた。全体を通して考えると、開かれた空間が生み出す信頼関係と、保育に対する全体的な視野の意義を見出すことができる。実際面での対応については、すでに述べたように園によっても状況によってもさまざまな形がありうるが、それぞれの園がよりよい入園期を具現化していく上でも、以下の二つは考慮すべき手がかりになると考えられる。

(1) 開かれた空間が生み出す信頼関係

どの保護者にも、入園期のさまざまなことを「ゆっくり、一緒にできる」こと、また園が「開かれている」ことへの信頼は共

通していた。このように園が「開かれてあること」は、情報や多様なコミュニケーション手段のみならず、体験や人間的な触れあいを通して実感されていくべきものだと考えられる。それは一瞬にして達成されるものではなくて、新しい生活に入っていくにも、同時に信頼関係を築いていくにも、必要な時間がある。慣らし保育の時間は、そのような時間として生かされるものだと考えられる。

(2) 保育に対する全体的な視野

すでに述べたように、先行研究においては、入園期における具体的な方法のありようや、子どもや保護者の適応の様子、「泣き」がどう収まっていくかなどに焦点が当てられることが多かった。それぞれの焦点には意義があるが、今回のインタビューでは、それとともに全体的、人間学的な視野を持つことの意義も示された。短期的な「適応」に焦点を当てるだけではなく、子どもにも保護者にも人と人として出会うとき、ライフサイクルの変遷といった全人的なテーマが、共感とともに浮かび上がってくる。

保育においてもこうした全人的なレベルでの共感と理解が重要だが、研究においても同じことが言えるだろう。今回の研究では、インタビュアーが保育や保護者支援の経験を持っており、クラスの中に自然に溶け込みながら、保護者に共感と敬意を持って耳を傾けたことで、「慣らし保育の実践方法」に焦点化していては見えなかったかもしれない、人間的な洞察を聴くことができたのではないかと思われる。

保育の中では、こうした人間的な洞察やライフサイクルの問題も、議論によってというよりは、生活に根ざした日々のかかわりの中から生まれてくるものである。保育を研究する際も、それが生活のリアリティに根ざしたものであることが重要であるように思われる。こうした視点から、「一人ひとりを大切にする保育」について新たな研究を進めていくことが今後も必要であり、また意義あることだと考えられる。

引用文献

堀合文子：入園期・子どもと保育者の心のつながり, 幼児の教育, 69 (6), 6−14 (1970).

今井麻美：子どもの幼稚園入園に伴い母親が保育者と関わることの意味, 保育学研究, 52 (2), 268 − 278 (2014).

厚生労働省：保育所保育指針, フレーベル館, 2008.

鯨岡峻：エピソード記述入門―実践と質的研究のために, 東京大学出版会, 2005.

倉橋惣三：新入園児を迎えて, 婦人と子ども, 16 (4), 137 − 142 (1916).

中村泰子：慣らし保育, 0 歳児クラスの保育実践（北郁子・西ノ内多恵・米山千恵 編), 中央法規出版, 1993, pp. 276 − 277.

西隆太朗：保育者の省察に基づく事例研究の方法論―子どもたちとのかかわりを通して―, 乳幼児教育学研究, 22, 53 − 62 (2013).

西ノ内多恵：入園当初における「親子登園」の意義―2 歳児プレイルームでの試みから, 保育学研究, 32, 59 − 66 (1994).

大場幸夫：こどもの傍らに在ることの意味―保育臨床論考, 萌文書林, 2007.

齋藤政子：新入園児の慣れ過程にみる泣きの変化と心理的拠点形成, 明星大学研究紀要 教育学部, 3, 55 − 70 (2013).

サライ美奈：ハンガリー たっぷりあそび就学を見通す保育―一人ひとりをたいせつにする具体的な保育. かもがわ出版, 2014.

Schön, D. A.: *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action*. Basic Books, New York, 1983.

清水玲子：慣らし保育を考える (1) ―1 歳

児の慣らし保育について，日本保育学会大会研究論文集，36, 494－495（1983）.
諏訪きぬ・金田利子・柴田幸一：3歳未満児の保育方法に関する研究（II）―ならし保育の方法をめぐって，日本保育学会大会研究論文集，42, 64－65（1989）.
土山忠子・平野信喜：保育所入所にみられる3歳未満児の状況（2）―ならし保育の視点から，日本保育学会大会研究論文集，37, 446－447（1984）.
津守真：子ども学のはじまり，フレーベル館，1979.
津守真：保育研究転回の過程，人間現象としての保育研究 増補版（津守真・本田和子・松井とし・浜口順子 著），光生館，1999, pp. 1－28.
吉村智恵子・望月久乃：幼稚園生活への適応について―入園当初の適応を中心にして―，名古屋女子大学紀要 人文・社会編，41, 151－160（1995）.

謝　辞

研究にご協力いただきました、A保育園の先生方、子ども達と保護者の皆様に、感謝いたします。